

## はじめに

皆さん、文法は好きですか。

外国人に日本語を教える仕事をしていらっしゃる方やそのような仕事を目指している方には、文法が好きだという方も多いでしょう。しかし、そのような仕事をしているわけでない方にとって、文法は、なかなか好きになれないものであるのも事実です。

文法が好きになれない理由は、何でしょうか。

その理由は、中学・高校で習った文法が、難しく理解できなかったからか、実際の生活で役に立たないと感じているからのどちらか、あるいはその両方でしょう。

しかし、本当はそのどちらでもありません。

難しいのは、それだけ、わかれば楽しいものである証拠です。ちょっとした考え方の手順を覚えれば、必ず、文法は理解しやすいものになります。

それだけではありません。たしかに、学校の文法が生活に役立つことは少ないかもしれませぬ。しかし、「本当の文法学習」は、日本語を正しく理解し豊かに表現するために役立つものです。

文法は、よりよい日本語人であるために、楽しく、かつ有用な<sup>ツール</sup>道具なのです。

本書は、学校文法を基礎として、文法全般に対する理解を深め、さらに応用を目指す本です。学校文法は、問題点もあまたありますが、多くの人が中学校や高校で時間を割いて勉強をしている基礎知識です。私は、この共有財産を活かすことが得策と考えます。

しかし、学校文法が抱えている矛盾のために文法嫌いになってはしようもありません。学校文法で整合性のない点などは、その理由を説明しつつ、あえて捨て置くことを提案します。本書では、その上で、現代日本語学研究によってもたらされた文法に関する新しい説明法を導入しています。

本書が想定している読者は、第一に、小・中・高等学校で国語を教える先生方や、先生を目指す学生の皆さんです。国語教育に携わる方には、学校文法をリフォームした、現代風の使いやすい「文法」を学んでいただきたいと思います。

さらに、国語にあまり縁のない方にも、文法が楽しく役立つものであることを知ってほしいと思い、作文で見られる「誤り」の理由を考えたり、身近な日本語に潜むさまざまな「しくみ」を考え深めたりして、文法を楽しく考えてもらえるよう工夫しました。

文法がつまらない、役立たない。

このような批判が聞かれなくなる日まで、私は、現代日本語の文法のおもしろさを、より多くの人に知ってもらえるよう、努力していきたいと考えています。

平成 26 年 8 月

山田 敏弘

# 目次

はじめに .....	i
本書の使い方 .....	iv

§1	品詞 .....	1
§2	活用 .....	7
§3	文の組み立て .....	13
§4	格助詞 .....	19
§5	副助詞 .....	25
§6	接続助詞 .....	31
§7	連用修飾・連体修飾 .....	37
§8	助動詞(1)：受身・使役・可能 .....	45
§9	助動詞(2)：否定・時間 .....	51
§10	助動詞(3)：判断ともくろみ .....	59

§11	助動詞に似た働きの形式(1)：評価と働きかけ .....	65
§12	助動詞に似た働きの形式(2)：補助動詞・複合動詞 .....	71
§13	敬語・待遇表現 .....	77
§14	文章・談話 .....	83
§15	文法とは .....	91
学習のヒント .....		95
参考文献 .....		106
おわりに .....		108

# 本書の使い方

本書は、さまざまな問題に取り組むことで、日本語文法を自学できるよう作られています。

## Point 基本の確認

例文を手がかりに、学校文法で学んだ基本知識を確認します。

## Think 問題

## Answer 解説

基本から少し発展的な問題まで、実際の問題に取り組みながら学びます。

すぐ次のページに解説がありますので、自分が間違えて覚えてきたことや、よく理解していなかったことが、よりよく理解されるでしょう。

問題③（§7では問題②と④、§9と§14では問題④）では、実際の小学生が書いた作文や大学生など大人が書いた文（実例を一部改変して、問題点をわかりやすくしてあります）に見られる「誤り」を、文法的な観点から考えます。ただし、この「誤り」は、規範意識に照らして見たときに誤用と言われるだけで、日本語としてよく使われる表現も含まれます。国語教師を目指す人は、使う場面を考えて文を書いた相手への確かな助言ができるようになるとよいでしょう。

なお、§7、§9、§14は、複数の事項を含みます。それぞれの事項に「基本の確認」を立ててあるため、問題と解説の数が多くなっています。

## Connect 古典文法と比較してみよう

「日本語文法」といって頭に浮かべるのは、高等学校で習う古典文法であることもしばしばです。この古典文法と現代語文法とを比較してみましょう。時間を越えた文法の比較によって、日本語がどのような言語なのかを、よりよく知ることができます。

\* 古典文法の説明に用いた例文の出典は、以下の通り。いずれもさまざまな辞書・参考書から引用した。

[古事].....『古事記』(712)	[和泉].....和泉式部『和泉式部日記』(1007～1008頃)
[万葉].....『万葉集』(782～783頃)	[源氏].....紫式部『源氏物語』(1015頃)
[古今].....紀貫之ら編纂『古今和歌集』(905頃)	[更級].....菅原孝標女『更級日記』(1059頃)
[竹取].....作者不詳『竹取物語』(平安初期)	[大鏡].....作者不詳『大鏡』(平安後期)
[土佐].....紀貫之『土佐日記』(935頃)	[平家].....作者不詳『平家物語』(鎌倉前期)
[伊勢].....作者不詳『伊勢物語』(平安時代)	[著聞].....橘成季『古今著聞集』(1254)
[蜻蛉].....藤原道綱母『蜻蛉日記』(974頃)	[徒然].....吉田兼好『徒然草』(1330頃)
[枕].....清少納言『枕草子』(1001頃)	

## **Action** 身近な日本語から考えてみよう

身近な日本語に潜む文法を解き明かしていくために、国語教科書の教材を含めた文学作品や歌の歌詞からも気になる表現を拾ってみます。なぜこのような表現がなされているのかを、その作品や作者と結びつけるのではなく、一般化できる言語の特性という観点で捉えてみましょう。この作業によって、より役立つ日本語文法が学べます。

## **Question** 発展問題

日本語学や言語学で議論する問題にも挑戦してみてください。ひとりででなく、何人かで知恵を出し合って、取り組んでほしいと思います。中には、答えがひとつに決まらないものもあります。多様な見方を培うことが肝要と捉え、自由に意見を言い合ってみてください。

## **Column**

本書での学習をより一般的な言語研究へと発展させるために、言語学の考え方や日本語教育での用いられ方など、有用と思われるトピックをコラムにまとめました。おおよそ、そのセクションに関連する内容となっていますので、一度目を通し、考え方のヒントとしてください。

## **Reflection**

自分の学んだことを振り返ってみましょう。わかったことだけでなく、疑問も同時に増えていく学び方をお勧めします。

本書は、同じ筆者による姉妹書『国語教師が知っておきたい日本語文法』を用いた大学での授業の補助プリントが元となっています。そのため、同書と章立てがほぼ同じになっており、副教材としてもご活用いただけます。本書から学んだ方も、細かい説明がほしい場合や、周辺について知りたい場合には、『国語教師が知っておきたい日本語文法』をご参照ください。本文では、《⇒(国)》と提示しています。

また、教科書教材を題材として、さらに発展的に文法について考えてほしい箇所については、発展として山田敏弘著『国語を教える文法の底力』を示しましたので、ご参照ください。本文では、《⇒(底)》と提示しています。

# § 1

# 品詞

## Point 基本の確認

「ねえ、この池では、よく魚が釣れるそうだね。」「だけど、変な魚が多いですよ。」

学校文法の基本は、**単語**に分けることから始まります。単語とは、「意味や機能をもつ最小の単位」です。単語に分ければ、辞書で意味を調べることができます。

まず、上の文を、意味を考えながら小さく切ってみましょう。

ねえ／この／池／で／は／よく／魚／が／釣れる／そうだ／ね／  
だけど／変な／魚／が／多い／です／よ／

さらに、その単語から文を始められる語と始められない語に分けてみましょう。

始められる：ねえ、この、池、よく、魚、釣れる、だけど、変な、多い →自立語  
始められない：で、は、が、そうだ、ね、が、です、よ →付属語

その語から文が始められる語を**自立語**、それ以外の語を**付属語**といいます。自立語は、活用《➡§2》の有無、および、活用の型あるいは文中での働きによって、次の**品詞**に分類されます。

ねえ＝感動詞、この＝連体詞、池・魚＝名詞、よく＝副詞、釣れる＝動詞、  
だけど＝接続詞、変な＝形容動詞、多い＝形容詞

このような自立語8品詞に、助詞と助動詞という付属語2品詞を加え、日本語の単語は10の品詞に分けられます。これらの単語を組み合わせると、日本語の文は作られます。

## Think 問題①

次の文を単語に区切ってみましょう。

(1) 昨日、マラソン大会があった。Aくんは速く走って、Bさんはゆっくり走った。

(2) ああ、この子は元気だね。しかし、あちらの子は病気だそうだ。

## Answer 解説①

単語に分ける際に迷ったことはありますか。それは、何ですか。

- 「あった」を1語とするか、「あつ／た」と切って2語とするか迷った。
- 「Aくん」や「Bさん」を、1語にするか2語にするか迷った。
- 「病気がそうだ」の切り方がよくわからなかった。

「あった」は、「ある」の活用した形「あつ」と、「た」に分けます。日本語の「た」は、ほかの語に付いて使われていても独立性があり切り出しやすいため、ひとつの単語と考えます。

「くん」や「さん」は、常にほかの単語に付いて使われます。このようなことばを接辞せつじといいます。接辞は、助詞や助動詞と違い、単語とは認められません。

接辞と、助詞や助動詞との違いは、必ずしも明確ではありません。ここでは接辞を、「限定された語と常にいっしょに用いられて、その語に何らかの意味を付け加えたり、その語をほかの品詞の語に変えたりする働きをもつ小さなことば」と捉えておきます。

「病気がそうだ」は、「病気」という名詞に、「だ」と「そうだ」という助動詞が2つ付いています。「病気だ」と「元気だ」は似ていますが、ふつう「病気な子」とは言わないことから、「病気」は名詞と考えます。「元気な」のように「～な」で名詞にかかる語は、「元気だ」「元気な」「元気に」など、活用語尾まで含め形容動詞と捉えます。

自立語と付属語の別に、(1)と(2)を単語に分けてみると、次のようになります。

- (1) 昨日／マラソン大会／が／あつ／た  
Aくん／は／速く／走っ／て／Bさん／は／ゆっくり／走っ／た
- (2) ああ／この／子／は／元気だ／ね／しかし／あちら／の／子／は／病気／だ／そうだ

正しく単語に分けると、形式とその機能とを対応させやすくなります。

## Think 問題②

(1)と(2)の文に見られる次の単語の品詞を言いましょう。

- ① 昨日                      ② 速く                      ③ この

## Answer 解説②

品詞分類を考える上で大切なことは、**形式と機能の区別**です。

「昨日」という単語は、次のように2つの特徴から分類することができます。

形式的分類	名詞	「昨日が私の誕生日でした」と言える（主語になる）
機能的分類	連用修飾	「昨日～あった」と動詞にかかることから、副詞的な働きを担っている

品詞は、形式と機能のどちらを優先するかで捉え方が変わってきます。学校文法では、形式が優先されるため、「昨日」は名詞に分類されます。

同じように、「速く」と「この」についても考えてみましょう。

「速く」	形式的分類	形容詞	「速かる(う)、速かつ(た)、速い...」と活用する
	機能的分類	連用修飾	副詞「ゆっくり」と同じく動詞「走る」にかかって動作のあり方を詳しく述べている
「この」	形式的分類	連体詞	活用をしない。また、現代語では、「こ」と「の」に分けられず、ひとまとまりで名詞を修飾する
	機能的分類	連体修飾	形容詞と同じように名詞を修飾している

日本語の活用のある単語は、ほぼ規則的に語尾が変わります。そのため、「速い」と「速く」はひとつの単語の活用形と捉えます。

## Think 問題③

次の作文の「誤り」を、品詞という観点から指摘しましょう。

- (1) Aさんが病気になることは知らなかった。病気になる人は、別の人だと思っていた。  
 従属節「Aさんが病気になる(こと)」の「な」は、助動詞「だ」の連体形です。

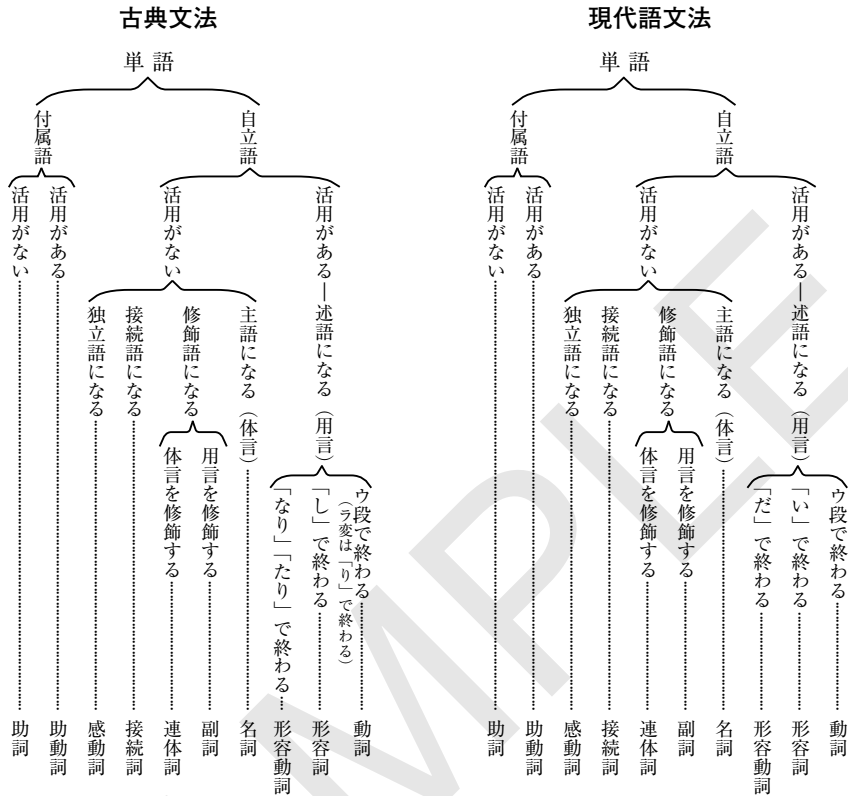
- (2) ピンクいバラを飾ったら、部屋がきれいになった。





## 古典文法と比較してみよう

次の2つの品詞分類表から、似ている点と違っている点を考えてみましょう。



「大きな」に対応する古典語は何か、現代語と古典語で品詞が違う語はないかなど、具体的な語を比較して考えてみましょう。

### Column 実は難しい品詞分類

「別な本」と言うか「別の本」と言うかで迷ったことはありませんか。「別な」は形容動詞、「別の」は名詞+助詞。品詞は違いますがどちらも使われています。そうすると、「この本は、あれとは別だ」という場合の「別だ」は、1語の形容動詞の終止形か「名詞+断定の助動詞」という2語か、すぐには決められません。

そもそも、「元気」も、辞書には、名詞とも形容動詞とも書いてあります。「元気がいい」と主語になることを主と捉えれば名詞になりますし、「元気な子」と言えることを考えれば形容動詞となります。

品詞には連続的な性質が認められます。学校文法では「元気な」と言える特徴を優先させて形容動詞と認めているのだと理解しておきましょう。

## Action

### 身近な日本語から考えてみよう

単語を品詞に分けることには、どのような利点があるのでしょうか。

活用をする品詞は、同じ活用を当てはめて文の中で自由に使うことができます。つまり、品詞がわかれば、いろいろな形に変化させられるのです。

たとえば、若い人が「恥ずかしい」の意味で使う「はずい」も、過去であれば「はずかった」、変化を表す場合には「はずくなる」と、表現したい意味に合わせて形を変えて使えます。これは、「はずい」を形容詞という品詞に分類しているからこそできることです。

品詞を考えることによって、文学作品をより深く味わえることもあります。小学校4年生の国語教科書にも載っているあまんきみこ作『白いぼうし』の最後の場面には、下のような文があります。

白いちょうが、二十も三十も、いえ、もっとたくさん飛んでいました。クローバーが青々と広がり、わた毛と黄色の花の交ざったたんぼぼが、点点のもようになってさいています。

(あまん きみこ『白いぼうし』)

ここでは、「黄色の花」ということばが使われています。なぜ、「黄色い」という形容詞を用いて「黄色い花」と言うのではなく、「黄色の」という名詞と助詞の組み合わせを用いているのでしょうか。自分の考えを言ってみましょう。

---



---



---



---



---



---

子どもの中に、「『黄色い』は薄い黄色で、『黄色の』は濃い感じがする」という意見がありました。しかし、実際の花屋で売っている「黄色のチューリップ」は、「黄色いチューリップ」よりも、本当に濃いのでしょうか。ほかの場面でも通用する、より一般化できるルール(=文法)を考えましょう。

このほかにも、さまざまな小説の中で使われる色の表現を、品詞を変えて考えてみましょう。

## Question 発展問題

(1) 「夜が明けると山が白だった」とは言えません。この場合、なぜ、色を表す名詞が使えず、形容詞で「白かった」と言わなければならないのでしょうか。また、「白だった」と言えるのはどのような場合ですか。いろいろな色でも考えてみましょう。

(2) 英語の 'quick' は形容詞で、'quickly' は副詞です。一見、日本語の「速い」と「速く」のような活用に見えますが、英語では別の品詞と捉えます。なぜ、英語の 'quickly' を、'quick' という形容詞の活用形と捉えないのか、考えてみましょう。

### Reflection

学習して深まったことをまとめましょう。疑問・質問があれば、書き留めておきましょう。

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---